

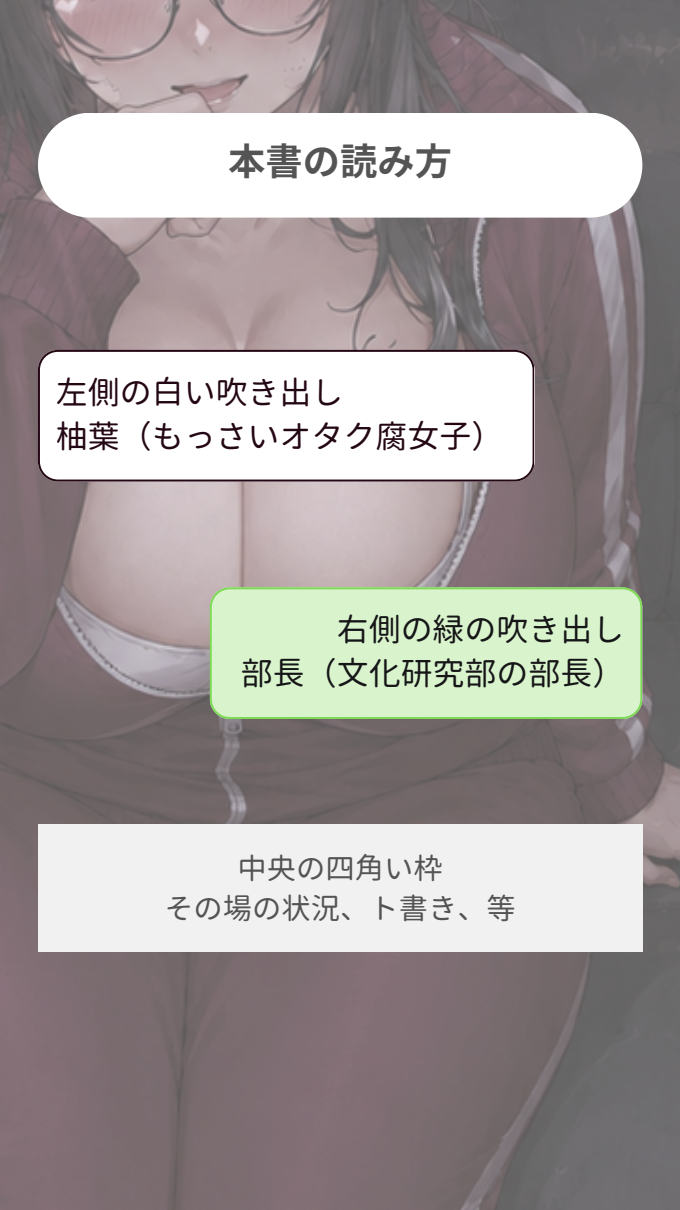
えっさい
オタク 窓

女子と

AI調教
フェラ
本番

部室。おんぼろ
ソファで
部長様 (ちおぽ)
をずぶずぶ
する話。

電脳ちょう教会



本書の読み方

左側の白い吹き出し
柚葉（もっさいオタク腐女子）

右側の緑の吹き出し
部長（文化研究部の部長）

中央の四角い枠
その場の状況、ト書き、等

放課後。

わたしは「文化研究部」の部室に向かう。
いちおう部長ではあるが、部員はわたしと
後輩の2人しかいない。

「あ、部長。お疲れ様でーす」

ソファから上半身だけを気怠げに起こし、
こちらに視線を向けた彼女。

緩んだジャージの胸元が危うくて、私は慌
てて視線を不自然に斜め上へと逸らす。

彼女の名前は

「長谷川 柚葉（はせがわ ゆずは）」。

「またそんな格好して……。
一応ここ、
学校の部室なんだけど？」

「いーじゃないですか、
どうせ誰も来ないですし。」

それに、このおんぼろソファ、
意外と体にフィットするんです
よねえ」

柚葉はふへへと気の抜けた笑い声を漏らしながら、抱えていたクッション（某アニメの推しキャラがプリントされた年季の入ったもの）をぎゅっと抱きしめる。

彼女のこのマイペースさに、
いつもペースを乱されてしまう。

「で、部長。
今日は何の『研究』します？

私、新刊の同人誌の
プロット練りたいんですけど」

机の上に無造作に広げられたノートをトン
トンと叩きながら、彼女が聞いてくる。

さて、今日も今日とて、
私たちの「活動（おしゃべり）」が
始まる。

かつての「文化研究部」は、
歴史資料や文化遺産を研究していた時期が
あったようだ。

だが、それは、数年前までの話。

今では、ただの同人サークルと化してい
る。

わたしは柚葉の隣に座る。

おんぼろのソファはぎしっと軋み、
柚葉の太ももが触れる。

「あ〜」
「新刊のネタを考えないとな〜」

「この前のコミケは、
危うく落とすところ
だったからな〜」

「柚葉」
「なんか、ネタはあるのか？」

「んえ？ ネタですか？」

柚葉はソファに背中を預けたまま、首だけをこちらに傾けてきた。至近距離。

心なしか、彼女が愛用している柔軟剤
（と、心なしか微かに香るスナック菓子の
匂い）が鼻腔をくすぐる。

「そうですね～。
私としては、次はちょっと趣向を変
えて『歴史ファンタジー』モノ
なんて攻めてみたいなあ、なんて」

彼女は抱えていた押しクッションの角を、むにむにと指で弄びながら続ける。

「ほら、うちの部活って一応『文化研究部』じゃないですか。

部室の奥の棚に、昔の先輩たちが残した地元の民話とか、怪異の調査ファイルみたいなのが埃被って眠ってるんですよ。

それをパラパラって読んでたら、結構インスピレーション湧いてきちゃって」

柚葉はにやりと、オタク特有の「良いこと思いついた」時の企み顔を浮かべた。

「例えばですけど、その資料にあった『江戸時代にこの地域で消えたとされる隠れ里』の伝承をベースにして……

そこに私の大好きな『身分差』と『執着攻め』の要素をトッピングしたら、最高の一冊が爆誕すると思いませんか？」

「……後半のトッピングの癖が強すぎるだろ」

ツッコミを入れつつも、かつての真面目な部活動の遺産が、令和の世で腐女子の後輩の妄想ソースにされている事実には、私は遠い目にならざるを得なかった。

「というわけで部長！

アイデア出し、手伝ってください。

まずは主人公の属性から決めましょ？」

柚葉はソファの上で嬉しそうに身を乗り出してくる。

触れ合っている太ももを通じて、彼女の体温がダイレクトに伝わってきて、私は新刊のプロットどころではなくなりそうだった。

「隠れ里か、、、」
「流行りの『因習村』
みたいだな、、、」

わたしは柚葉を抱き寄せ、キスを交わす

「これで、リアリティのある
アイデアが、出てくるかな？」

「……ん、ふ……っ」

不意の行動に、柚葉の小さな悲鳴のような
吐息が、重なった唇の隙間から漏れる。

いつもはマイペースで飄々としている彼女の
身体が、一瞬でビクッと強張るのが伝わ
ってきた。

少しして唇を離すと、柚葉は顔を真っ赤に染め、トロンとした目でこちらを見上げていた。

手元で抱きしめていた推しクッションは、いつの間にか床に転がっている。

「……ぶ、部長……。
それ、なんのリアリティ
ですか……っ」

彼女は消え入りそうな声で抗議しながらも、私の胸元にコト、と額を預けてきた。

発育の良い身体の重みと、ドクドクと速くなる彼女の鼓動が、ダイレクトに私の身体に響く。

「……でも、ずるいです。

そんなことされたら、
因習村のプロットじゃなくて、
別の……

もっと、えっちな妄想しか
出てこなくなっちゃうじゃないで
すか……」

上目遣いで、恨めしそうに
(あるいは、もっと求めているように)
私を見つめる柚葉。

放課後の、誰も来ない、生徒会からも忘れ
られた部室。

ぎしりと軋むおんぼろソファの上で、私た
ちの「研究」は、当初の予定とは全く違う
方向へ脱線し始めていた。